第787号 平成22年12月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日　第三種郵便物認可

2010年（平成22年）
12月号（No. 787）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

「一般法人」か「公益法人」か――12月理事会も集中討議

定例の12月の理事会は、8日18時半から、ほぼ全員の理事が出席して日本山岳会会議室で開かれた。審議、報告事項ののち、2時間近くにわたって、再度、法人改革問題について討議があった。その具体的な内容を3ページにわたって紹介する。なるべく話し合いの内容と雰囲気が伝わるよう、極力、編集はせず、再録するように心がけた。

JACの社会的評価

A「私は一般法人を選ぶべきだと思っていますが、なにも公益活動をしない方がいいと主張しているわけではありません。JACが発足当初からやってきたような公益的な活動は十分にすべきであると思います。ただ、今回の公益法人の改革目的が、〝不特定多数の人に対して活動するのが主要目的である〟という点にひっかかるのです。われわれの主要な活動は、仲間で山に登って楽しむという点であって、公益的に一般の人にサービスをするということではないと思います」

B「先月、僕は公益法人を主張しましたが、まず自分なりにメリットとデメリットを考えました。その結果、JAC自体が公益性の高い集団であり、高いステータスも確保できるという点などから、やはり公益法人がいいと思いました」

A「公益法人の方が格が上で、一般法人は下だという意見がありますが、この〝格〟〝ステータス〟というのは、あくまで相対的な考え方であって、一般法人であっても十分な公益活動であるという考え方で矜持を保てば、むしろ一般法人であることで、ステータスが高くなると言えます」

C「先月の公益法人化賛成の議論のなかでぬけていた点があります。それは、公益法人への移行にはハードルが高いと言われていたけれど、現在われわれがやっていることは、公益活動として認められ、公益法人として十分に受け入れられる。つまり、今のままで公益法人の認可を受けられるのならば、われわれ会員は従来となんら変わることなく活動ができるということです。僕はそうした意見に強い共感を覚えます」

A「会員を増やしていくのに、公益法人でなければ難しいという意見がありますが、私はむしろ逆だと思います。公益法人化によって、ボランティアや奉仕活動が前面に出るよりも、クラブライフを楽しむ仲間の輪を広げていくほうが会員増につながると思います」

C「一般法人を選んで、自由な立場でこれからのJACを運営していくことは、決して会の衰退にはつながらないとおっしゃるけれども、僕にはそう思えません。クラ

目　次

「一般法人」か「公益法人」か――12月理事会も集中討議‥ 1
新法人制度対応への検討課題‥ 4
「公益」で更なる支部活性化を‥ 6
希薄な「公益法人」化推進の根拠‥ 7
平成22年度年次晩餐会開く。新入会員、大きく増加‥ 8
常にチャレンジ――第十九代会長 齋藤惇生氏‥ 11
東西南北‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 12
　ノシャック登頂　50周年記念交歓会に参加
　富士山登頂1000回を達成した實川欣伸会員
活動報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 14
　集会委員会／図書委員会／三水会
支部だより‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 16
　静岡支部／東九州支部
図書紹介‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 18
会務報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 20
ルーム日誌‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 21
会員異動‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 21
新入会員‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 21
INFORMATION ‥‥‥‥‥‥‥ 22
図書受入報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 22
学生ネットワーク作り(4)
　若い人たちへの期待と東海支部‥ 23

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木‥‥‥‥‥‥‥10～20時
水・金‥‥‥‥‥‥‥‥‥13～20時
第2、第4土曜日‥‥‥‥‥‥閉室
第1、第3、第5土曜日‥‥10～18時
年末年始休室　12月29日～1月5日

ブライフを楽しむための、好きな者同士で集まろうというだけでは、やはり会は衰退するだろうと思います」

B「今のＪＡＣで自由にやったら、意識はもっと低下していくと思います。やはりどこかで努力しなきゃいけない。常にそういうことを意識して活動しなければ、こういうボランティア活動はなかなか前進しないような気がします」

D「公益法人になると、相当義務的なものが発生しますよね。われわれがここで、できますよとコミットしていいのかという不安があります。本当に今後10年、20年にわたって、やっていけるのかどうか。託された人たちに対して責任がもてるのか。であれば、とりあえず一般法人を選んで、どうしても公益法人がいいというのであれば、その時にまた判断すればいいという選択肢もあると私は思います」

E「今日の議題の一番最後に、ある会員の方から来た投書を載せています。11月号の会報を見て、理事会宛に送ってきた投書でしたので、理事会の皆さんには見ていただいた方がいいと思い載せておきました。この方も、まず一般法人を選び、その後、十分議論を重ねて、その結果、公益法人を選んだらいいという意見でした」

ＪＡＣのあるべき姿

A「やはり、何を目的にするかという点が大切だと思います。僕は、ＪＡＣ-ＹＯＵＴＨ ＰＴのような考え方をすれば、明らかに会員増加につながる。こういうものを充実させていったら、5年後、10年後にどんどん実ってくると思います。目的の掲げ方でね。一般法人だから安直で目的が不十分だというのは、それは会の運営の拙劣さによるのであって、会の中身をどう充実させていくかによって、集団としての結束力はむしろ強まると思う。義務があまりない会の結束というのは、強まると非常に大きいと思います」

B「ＪＡＣのことだけを考えれば、一般法人でもいいのかもしれないけど、これからの登山界全体のことを考えると、ＪＡＣは社会的な役割を担わされている、公益性が非常に大きいと思うんだよね」

F「組織を作った目的がどうだったかを考えるべきだと思います。ＪＡＣがどうあるべきかということです。もし、ＪＡＣが、登山だけでなく登山文化だとか、山岳自然環境だとかということに、日本の社会的影響を及ぼすリーダーシップをとっていくんだという明確な目的をもって、その意思をはっきりさせたうえで活動するのであれば公益法人をとった方がいいと思います。しかし、ＪＡＣがどうあるべきかという統一見解があいまいなので、そうすると、山を愛する人たちが個人加盟している団体ですから、一般法人のほうが妥当なのかなと私は思っています」

B「現在、ＪＡＣは社団法人ですよ。個人のクラブであるんだったら、社団法人でなくてもよかったという考えにもなりますね」

F「いや、ＪＡＣはこうあるべきだ、こうしたいんだっていうような議論をしないとね、本来決まらないと思います。その視点が欠けているから、議論が十分尽くされてないと、僕は思うんです」

G「公益法人のメリットに税金の優遇制度がありますね。特に今後、大きな寄付を受けるような場合、税制面での優遇がなければ、今の財政では破綻してしまいます。で

「一般社団法人」と「公益社団法人」の比較（2008年3月号の『山』より）

	一般社団法人	公益社団法人
メリット	①国の指導･監督がなくなる。 ②公益事業にとらわれず、支部も含めた活動の自由度が増大する。	①社会的評価が格段に高まる。 ②寄付金控除等の税制上の優遇措置が受けられる特定公益増進法人になる。 ③JACの現有財産の安定的確保が図れる。 ④“森づくり”における公有地の借受けが容易。
デメリット	①社会的評価が低下する。 ②税制上の優遇措置が受けられない（営利法人に対するとほぼ同様に課税される）。 ③JACの現有財産の確保が困難。公益目的支出により概ね２億円以上（推定）の支出が強制される。 ④“森づくり”における公有地の借り受けが困難になる。	①国の指導・監督が厳しくなる。 ②公益事業の推進を求められる。 ③収支における公益目的支出が、支出の50％以上と規定される。 ④“支部”の扱い及び“支部助成金”の扱いを検討しなければならない（支部助成金の使途の明確化）。

も寄付とか優遇制度の話にばかりとらわれてしまうと、本来のあるべき論にいかないと思うんです。私もあるべき論で考えたら、一般法人の方がいいんじゃないかと思います」

現在の活動は公益的か

H「私自身、入会以来関わってきたのが自然保護委員会でしたから、公益性というのがいつも念頭にありました。入会者のなかでも高齢者は特に世の中に貢献したいという人が多いと思うので、その点からも公益法人を選ぶべきだと思います」

F「私もそういう意味では、個人的には公益活動をしてきたと思うんです。そう言いながら、一般法人がいいと思っているのは、みんな無理して公益活動をするんだという意識を働かせてしまう。それを危惧するからです。もっと自由に考えられないかと」

E「私たちの会で、委員会の活動はまさに公益活動だと思うんです。今の組織そのものが、公益活動を指向している。だから、このまま公益法人になれるということです。今のＪＡＣそのものが公益法人なんじゃないかと思うんですね。それを、一般法人になって、何か無理な形に崩していく必要はないと思います」

C「ＪＡＣの公益性というのは、前の法律でも保障されてきたし、今でもそのままやっていれば、公益法人としてやっていける。それに公益法人を選べば、ステータスが違うというか、品格が違ってくると思います。ＪＡＣは、これまで百年の貴重な歴史を刻んできた。それが、法律の枠がかかるけれど、これまでやってきたそのままで公益法人として認められるなら、そのほうがいいんじゃないかと、単純にそう思っています」

A「一般法人でも同じことがいえるんじゃないかと思います。今までどおりのことをやっていて、一般法人でいけるんじゃないかと。それに同じ活動であれば、後世の人たちに対する自由度も増える。公益法人になった時の束縛という点について、みなさんの認識は少し甘いと思うんですよ。監督官庁があるかないかとか、拘束されるという点にもっと危機感をもたなくてはいけない」

B「僕は拘束や束縛が、一概に悪いとは思わない。束縛されることによって、力になるというか、ひとつのバネになって高い目標をもつこともできる」

A「そういう外部の拘束によって成り立つような山岳団体だったら、ボランティアとしてやる以上、もう意味がないんじゃないか」

C「一般法人を選んだ場合、どうしても組織が痩せ細ると思うんです。このままだと、それこそ会員数の減少とか、財政を維持するための会費収入などが、下降線をたどる一方なんですよね。だからこそ、より広い層をＪＡＣのなかに取り込んでいく必要があると思うんです。これまでよりも、より広い間口で構えたほうがいいんじゃないかと思ってるんですよ」

D「であれば、自由というか、枠とかをかぶせないで、少しでも自由が大きい方を選択していくべきだと思うんですけどね」

I「僕は、一般法人でも公益法人でもどちらでもいけると思っています。ただ、ひとつ言えることは、未来は若い人のなかにあるということです。若い人がやりやすいことは何なのかと、それを考えないといけないと思います。今まで、僕ら学校山岳部出身者がＪＡＣを作ってきた歴史がある。ところが最近はほとんどの学校山岳部が崩壊しているわけですが、培ってきたしっかりした教育システムはもっています。そういう教育システムを維持し、今後の若い人たちにも意識して教育していく。その点を考えないと、一般法人か公益法人かを選んでも、絵に描いた餅になると思うんですね」

C「まず、大学山岳部をはじめ若い人たちに魅力的な組織にすることを考えなければいけないということでは、まさにそのとおりだと思います。若い優れたリーダーを育てなくては、ＪＡＣの将来はありません。それはそうですが、今ある組織をどうやって運営していくのかということとは、ちょっと違うと思います」

J「私も、底辺を広げるという点では、やはり公益法人にした方が、効果があると思うんですよね。優れた人材を育成するには、底辺を広げていった方がいい。登山者を増やして、山の文化を広げるためにも、やはり公益という文字ははずせないと思いますが、いかがでしょうか」

（文＝神長幹雄）

法人化問題

新法人制度対応への検討課題

佐野忠則

社団法人日本山岳会（ＪＡＣ）は民法に基づく公益法人ですが、平成20年12月1日の改革新法施行により、いやおうなく変革が求められています。この改革は、中央省庁と特定団体との癒着、天下りや民業圧迫を排除することが主なねらいとなっており、日本山岳会のように、会員の会費とボランティア活動によってまじめに運営してきた公益法人から見ると「とばっちり」と言わざるを得ないような面も多々あります。

とはいえ、新制度への早急な対応が求められています。平成25年11月30日までに内閣府から「公益社団法人」としての移行認定を受けるか、または公益性の認定を受けない「一般社団法人」への移行認可申請を行なう必要があります。「一般」で法人としての認可を受け、条件を整えて「公益」へ切り替えるという選択肢もありますが、それは採りたくないというのが大勢です。

どちらへ移行するにしてもいくつかのハードルがあります。

「一般」を選んだ場合、既存の社団法人であるＪＡＣには、保有する財産の処理に対する規定が適用されます。いまＪＡＣは3億円程度の財産を持っていますが、それはこれまで公益法人として無税で蓄積した財産とみなされ、公益性を問わない一般社団法人に移行する場合はほかの類似団体に全額寄付するか、またはその財産がゼロになるまで公益目的事業（支出）で消費することが義務づけられています。

この「公益目的支出計画」には何年でという期限はありませんが、計画を提出したあと、財産がゼロになるまで監督・規制が続きます。もっともこの規制は必ずしも本会が所有する純資産を減らすことではなく、法で定める公益事業を実施するなどして、毎年使うお金の合計額が財産額に達するまで続けることでも構わないとなっています。ゼロになったあとは自由です。

一方「公益」では、公益目的事業が法人の主たる目的となっていて、毎年行なう公益目的事業の実施にかかる経費が、ほかの事業の経費や法人の運営にかかる経費との合計のなかで、50パーセント以上を占めていることが必要です。年間の経費が７０００万円ですと、公益目的事業の経費が３５００万円以上ということです。

この条件のクリアが将来にわたって可能かどうか。ＪＡＣの自律的な活動を阻害したり、大幅な変更を強いられることにならないか。その検討がポイントです。今年1月末に出されたプロジェクトチームの中間報告の試算（平成20年度末の決算書に基づく検討試案）では50パーセントをクリアしています。見通しとしては、現在の活動内容を変えることなく長期的にクリアできそうだとされています。

以上、選択に当たっての基本的な条件をおさらいしました。双方のメリット、デメリットについては2パーセントにまとめてあるので省略します。

『官庁からの制約を受けず、公益性に縛られることなく、クラブが本来もつ自由を大切にすべきだ』という「一般」支持の意見があります。一方で、『50パーセント以上という規制があってもこれまでどおりの活動で公益性がクリアでき、将来展望がもてる』と「公益」を主張する意見があります。

ＪＡＣがこの先どのような会（クラブ）として存続するのか。選択肢が問われています。理事会が、来月の討議でどちらを選択するか、見守りたいと思います。

＊

参考までに、内閣府に設けられた第三者機関「公益認定等委員会」が12月1日付で発表した資料（新法人制度施行3年目を迎えて～民による公益の増進を目指して～）によりますと、内閣府では、これまでに約９００件、最近3カ月だけで約３００件の申請を受け付けており、「申請に対しては、民間による公益活動を行なおうという志に基づく法人の創意工夫や自主性をできる限り尊重し、温かく審査に臨んでいる」とあります。これまでに約４００件について認定等を行なったそうです。

なお、法人改革対応検討プロジェクトチームの報告書は12月2日にまとまり、10日には常務理事会に内容を説明しました。報告書

は「理事会における新法人移行にかかる意思決定に資する資料を提供し、移行に伴う規程類・経理方法等についての提案をする」目的で書かれており、「公益」か「一般」かの選択にはふれていません。

報告書に盛り込まれた「支部の扱い（位置づけ）」、「委員会予算や支部助成金の問題」「定款および規程類の改正」などに関わる問題は、次の「新法人移行プロジェクトチーム」（仮称）に引き継がれ、来年6月に予定されている平成23年度総会に向けて、理事会で検討されることになります。

会報『山』で取り上げた法人対応の記事とオピニオン

法人対応問題が提起されて以後、ほとんどの会員が会報でJACの新法人対応の情報を知り、オピニオンページなどを参考にしながら「公益」か「一般」かの選択肢を考えてこられたと思います。会報にはどんな記事、意見が掲載されたか、主なものを拾ってみます。

①平成18年7月号＝5月の通常総会（平山会長）報告記事で「公益社団法人への移行準備進める」と伝えた。

●同月、公益法人改革3法が成立している。

●同会長は退任後、19年12月号の「提言」欄で、法人選択はJACの根幹に関わる問題なので軽々に結論を急ぐことはない、と述べた。

②20年1月号＝宮下会長が新年の所信表明で「公益社団法人化推進と首都圏ブロックの支部化で活性化に活路を」と述べた。

●これより先、宮下会長のもと19年7月の理事会で「公益法人化プロジェクトチーム」委員が選任されている。

③20年3月号＝プロジェクトチームの佐野委員が問題点を整理し、「一般」「公益」双方のメリット、デメリットを詳細に比較するとともに、新法に合わせた定款の改定にもふれて現状報告をした。

④20年5月号＝「法人制度改革と山岳会の対応」と題して宮崎副会長が執行部の取り組みを報告した。新法に対処するため、いずれを選ぶにしても、20年度の事業計画から公益目的事業を明確化し、各委員会、支部がスムーズに活動を展開できることを第一に考えていることを説明した。

5月号ではまた、会員から寄せられた2つの意見を紹介した。

織方郁映会員は、アルパインクラブとしてのJACの存在意義はなにかと問いかけ、「公益」に縛られないために「一般」であってもいい、とする意見を述べた。一方、小林建夫会員は、この機会に山登りの会から自然保護も柱に据えた組織に変革して会員増につなげるべきだとの立場から「公益」志向論を展開した。

●20年12月1日。新法施行。

⑤21年6月号＝尾上会長が就任し、「マニュフェスト」欄で、22年の総会までに方針を決定すると約束。7月号で新プロジェクトチーム（吉永委員長）の発足を伝えた。

⑥21年8月号＝大森弘一郎会員がJACの公益性について「マニュフェスト」で公益志向を述べる。

⑦22年1月号＝尾上会長が新年の所感。法人対応（選択）を重要課題と捉え「JACの再生と復権を目指す」と述べた。

⑧22年7月号＝22年度総会の報告に関連して吉永委員長が新法人制度対応の中間報告を紹介した。

⑨22年8月号＝織方会員「新公益法人問題について思う」、同10月号＝内田博会員「公益法人新法が問いかけるもの」掲載。11月号に「理事会が集中審議」の記事。

なお、12月2日付で、常務理事会、理事会宛にプロジェクトチームの報告書が提出されました。会報1月号で要旨をお伝えする予定です。

＊

11月号にも書きましたが1月中には理事会が選択肢を決め、3月の総会に諮って理事会決定の賛否を問います。総会は会員の3分の1の出席で成立し、議案は出席者の過半数で決すると定められています。

ただし「あらかじめ書面で意思を表示したものは出席者とみなす」とありますから、法人の選択肢についても返信で意思表示できますし、出席者や議長（会長）に委任することもできます。会員一人ひとりの意思が、総会決定でいかに大切で重いものであるかを認識され、出席できない会員はぜひ、ご自分の意思を、意思が正確に反映される方に託していただきたいと思います。

（成川隆顕）

法人化問題オピニオン①

「公益」で更なる支部活性化を

兼森志郎

いまターニングポイント

高齢化や会員減など極めて厳しい環境下にあるＪＡＣも、昨年来の新執行部のもと「再生と復権」を掲げて4つの改革プロジェクトがスタートし、東京本部の動きも、わずかずつではあるが元気になってきたように思います。地方支部でも、それが感じられるようになりました。

そんななか、「公益」か「一般」かの選択を迫る新法人制度への対応は、ＪＡＣ２００年を展望するとき、再生と復権の帰趨を決するほどの、まさにターニングポイントだと思えてなりません。

新法人制度は、天下り法人を排し、「民」の力を活用して本来のあるべき法人をさらに活動しやすくする改革だと受け止めます。百年余の歴史を持ち、公益法人法のもと、これまで「社団法人」として社会的にも栄誉ある地位を築いてきたＪＡＣこそ、将来にわたって「公益」を名乗るにふさわしい模範団体のひとつでなければならないと思います。これまでの会員の努力の積み重ねを無にしたり、ゼロからのスタートにもどるような選択をしてはならないと考えます。

必要な社会貢献の視点

わがＪＡＣは定款の第2章《目的および事業》に、単なる登山愛好者の懇親団体にとどまらないことを明記しています。いわく「登山の指導奨励」「あまねく体育、文化ならびに自然愛護の精神の高揚を図ること」などです。一般にいう同好会と違って、高い志をもつものグループです。単なるサロンではありません。その意味で、われわれ支部も、大いに社会貢献への参画意識を持つ必要を感じています。

広島支部では、7年目を迎えたジュニア自然学校も含めて11クラス、在籍２００名の登山講座を、32名の指導スタッフで担当しています。皆さん大いにやりがいを感じているところです。その副産物として来春には、講座を履修してＪＡＣの会員になった人が50名を突破しそうです。さらに数年後には、支部ルーム設置の夢が適いそうなところまできています。公益活動が支部員の参加意識を刺激し、活性化に大いに役立っています。

以上はひとつの例ですが、支部創立から13年のさまざまな活動を振り返り、わがＪＡＣに「公益社団法人」以外の選択肢はないと思います。支部同士の交流、情報交換からも一般法人を唱える人の声は聞いたことがありません。

これからの活動は行政、財界、学会、一般市民などとの連携を避けては通れません。登山で培ったノウハウやパワーを公益のために発揮することは、同時に、痛快なことでもあり、みんなのモチベーションを高めます。支部活動の場がない東京の区部や神奈川の会員には分かりにくい面があるかもしれませんが、支部での日常活動は自己啓発そのものです。私の見るところ多くの支部が「公益」選択を望んでいるように思います。

活動のエネルギー

10月発行の「宮崎支部報」第34号に末永軍朗支部長の挨拶が載っています。「日本山岳会は日本の登山界をリードする組織であるだけに大きな社会的責任を有します。これからはただ自分たちだけが山に登って楽しんでいればよいという考え方から、登山を通じて社会に貢献するという公益的思考が求められるようになってきたのではないでしょうか。（自身の）登山を大いに楽しみながら、あとに続く人を育て、自然愛護の精神を養う。（結果）登山そのものが社会的貢献と自己啓発の場となり、それが大きな意味での『不特定多数の利益の増進に寄与する』公益活動になっていると思います」（要旨）とあります。

まさにそのとおり。「公益法人」というステータスは、山登りで結ばれた会員の活動のエネルギーです。そのうえ「認定」のハードルも当初考えられたほど高くないとか――。

『山』11月号掲載の《「一般」か「公益」か》を何度も読み返しました。理事会での論議が的確（と思われる）に示されており、判断の参考になります。ＪＡＣの将来を展望しながら論議は白熱しているようですが、支部の運営に関わる総務委員会を預かり、さらなる活性化を図りたい私としては「公益」を強く望んでいます。

法人化問題オピニオン②

希薄な「公益法人」化推進の根拠

村山裕嗣

「公益法人」が既定方針か

近ごろの会報を見ておりますと、すでに既定方針の合意のもとに事が進められているような気がしてなりませんでした。困った事だと思っていた矢先の会報8月号に、織方郁映会員のオピニオン記事を読んで、「これはしたり。まさに正鵠を得ている」と膝を叩きたくなるような感慨を抱きました。公益法人化反対の的確な意見が掲載され、ある種安心し、また感心したものです。

その後、ある集まりで織方会員にお会いした折り、感想を伝え「それにしても反対意見が出てきませんね」「無視されているのでしょうか」などと話しておりました。

続いて10月号での内田博会員による数理を尽くした、こちらはむしろ「公益化推進慎重論」といった意見が述べられました。

本会の公益法人化慎重、すなわち反対意見の概要は、前出の両会員の主張におおむね集約されています。加えて私が、執行部の方より「賛成、反対の意見を広く募る」という趣旨に沿い、以下私見を述べようと思います。

今さらステータス

「公益法人化推進派」の方の主張の根拠を大別しますと、乱暴ですが以下の二点ではないでしょうか。「見栄」と「実利」です。

「見栄」というと言葉は悪いのですが、要は公益法人認定による社会的ステータスの確立（もしくは保持）と思われます。これについては織方会員の意見の冒頭部分に痛烈な文言がありますのでそれを引用します「（本会は）実力と栄光の重みによって無冠であることこそ似つかわしいと思っていた人々には、そこまで落ちたかと、嘆かわしいことだろう」と。

ただ公益化推進の方にとってもっと愁眉の問題は、この社会的認知の御旗を保って会員増につなげたい、そのためには必要不可欠な条件であるとの話も聞きます。しかし、これは「木を見て森を見ず」の類いではないでしょうか。

会員減少または微増（？）の因はもっとほかのところにありますが。会員の頭数を増やすだけならほかにも方法はありますが、果たして執行部は何人くらいが適正な会員数とお考えなのでしょうか。目標値を大まかに画し、それに準拠して動く事も一考です。この際ついでにふれておきたいのは、退会者（高齢者を除く）に可能な限りアンケートを実施してもらいたいことです。また旧態依然の「入会申込書」の体裁を、文字通り刷新したらいかがでしょうか。

「実利」があるのか

続いて「実利」についてふれますと大別して、税金、寄付、資産の三点です。

まず「税金」に関していえば「課税強化」という文言が、特に初期のころ、一人歩きしておりました。しかし本会においてはまったく埒外で、これは全国に2万5000余ある公益法人の名のもとに営利事業を営んでいた団体をターゲットにしたものです。税金と言えばむしろ次の「寄付」金に対する優遇税制措置の問題がありますが、これに関してもすでに織方会員の賢答が示されております。

そして次の本会保有の「公益目的財産」の、対象を公益目的事業に絞った全額費消については一見そら恐ろしいような要望に思われますが、10月号の内田会員の記事中でこれに関して極めて明察な見解がありますので引用します。

「全部吐き出すよう新法は求める。その期限は設けてないから、100年かかってもよい建前になっている。本会は、公益目的事業に該当する公益事業を行なっているから、この要請は大きな問題にはならない」

およそ他者との関わり合いに多かれ少なかれ含羞や疑義を抱きつつ山を歩き、攀じり、楽しみ、からくもヒトとしての社会性を保ち世間にコミットし、またされつつ生きてきたわれわれ山好きの人間にとって、今さら「ほかの社会的存在」を将来にわたって担保されるような事には、どうも馴染まないのです。

それと11月号会報の、理事会の記事中にある「理事会提案が否決されれば、執行部の不信任」とありますが、そこまでパセティックにならずともよいと思います。

ディナーパーティ

平成22年度年次晩餐会開く
新入会員、大きく増加

■467人が出席、会場変わる

平成22年度年次晩餐会は12月4日、東京・品川の品川プリンスホテル・アネックスタワーで開催した。皇太子さまがお忙しい公務のなか、一昨年、昨年に続いて出席されたのをはじめ、467人の会員が集い、なごやかに歓談した。新入会員が昨年に比べ4割増と、大きく増え、尾上会長は「近年、まれなこと」と大喜びだった。

■会長挨拶　若い会員が頑張る

会場が、これまでのグランドプリンスホテル新高輪から品川プリンスホテルに変わった。アネックスタワー5階は、複数のスペースを組み合わせて利用することができる。講演会・展示会などを1フロアで開催することができた。いつものように晩餐会のテーブルには、「富士山」、「北岳」などの山名がつけられた。皇太子さまは「富士山」のテーブルにつかれた。

尾上昇会長は、皇太子さまをお迎えできたことを喜び、続いて日本山岳会の現状などについて、次のように報告・挨拶した。

「日本山岳会の大きな問題、課題は、会員が漸減していることだ。このことは財政の逼迫、会勢の衰えにつながっていく。若い人が少ないことは、将来への不安を残すことになる。いったい、どうすればいいのか。会長に就任して以来、繰り返し話してきたことだ。しかし、今年は嬉しいことがある。この晩餐会で紹介する新入会員が140人を超えた。近年ではまれに見ることだ。改革の効果が出てきたのかと喜んでいる。若い会員を増やすためにJAC-YOUTHを立ち上げ、講習会や実地登山、研修会を開催、多くの若い人に参加してもらっている。かつて会を支えていた青年部も活発に活動し始めた」

■新名誉会員に日下田實会員

物故会員に対して黙祷した。昨年の晩餐会以降に亡くなられた会員は60人。若林啓之助、梅棹忠夫の2人の名誉会員、評議員として活躍された寺西申生氏、信濃支部長を務められた金子丞二氏、元副会長大森薫雄氏、鯵坂青青氏ら。そしてダウラギリでは田辺治氏が帰らぬ人となった。心からご冥福をお祈りしたい。

新名誉会員が紹介された。日下田實会員である。日下田会員は、日本山岳会第三次マナスル登山隊の隊員として1956年、マナスルの世界初登頂に成功し、その後、評議員などを務めた。1930年、栃木県益子町生まれ。早稲田大学山岳部時代は、剱岳、穂高岳などの積雪期登山を成功させるなど当時の学生登山界をリードする登山家として活躍された。

尾上会長が名誉会員章を手渡された。日下田名誉会員は「第二次・第三次マナスル遠征隊員に選ばれ、偶然にも頂上までいった。栃木支部を立ち上げたことも、名誉会員に推薦された理由かな」などと話された。

皇太子さまを中央にして恒例の鏡開きが行なわれた

■新永年会員は30人

新しい永年会員は30人。1960年4月から翌年3月までに入会し、以降継続して50年間、会員として活躍された。会員番号は3765と5068から5228である。当時は日米安保条約改定で騒然としていた。高度経済成長が始まろうとしていた。16人が出席され、スタッフがそれぞれの会員席に出向き、永年会員章を手渡した。

新永年会員（会員番号順）

長尾登之助、市川次良、植西武司、平林克敏、村井龍一、井口拓夫、堂本暁子、鏑木昇、舟橋明男、松浦輝夫、中嶋啓、石井久夫、式正英、赤井一隆、飯島正敏、長尾悌夫、福田勝一、望月計市、大橋靖子、中世古隆司、石原國利、大口瑛司、高橋英彦、安藤治、松井

芳隆、青島秀夫、酒井工夫、熊田宗次、兼清喜雄、國見利夫

新永年会員を代表し、松浦輝夫会員が挨拶した。「60年は220人が入会したと聞いている。登山ブームだった。1970年のエベレスト隊に参加し5月11日、頂上に立つことができた。素晴らしい天気だった。頂上まで8時間かかるだろうと考えていたが、3時間ちょっとしかかからなかった。あと5メートルのところで植村直己隊員が『先に登ってください』と言うので肩を並べて頂上に立った。シェルパ、ポーター、いや日本山岳会の組織、それを支えているみなさんの力の賜物と、いまでも思っている。山登りの楽しさ、苦しさ、厳しさを伝えていきたい」などと50年を振り返った。

467人の会員が集まった品川プリンスホテルの宴会場

■山森欣一氏に秩父宮記念山岳賞

第12回秩父宮記念山岳賞は、「人間に焦点を合わせた、ヒマラヤ登山の実態把握と遭難状況（ヒマラヤ＋国内）の調査研究」をまとめた山森欣一会員に決まった。表彰式が行なわれた。山森会員は「名もない多くの人たちが頂を目指して活躍し、ある人は登頂し、ある人は戻らなかった。戦後、花開いたヒマラヤ登山を、100年後の登山愛好者が検索し、そこから新しいものが生まれてくる。日本の登山で亡くなった人の事例もまとめた。帰らぬ人たちの登山に対する想いを残したい」などと記録を取り続けてきた心境を披露した。

■新入会員は4割増の142人

続いて新入会員の紹介。今年は142人が新しく会員に加わった。昨年は104人、一昨年は51人だった。うち33人が出席。代表して船村徹会員が挨拶した。

船村会員は、日本を代表する作曲家。手掛けた曲は約4500曲にのぼる。日本作曲家協会会長などを務めている。代表曲は、『別れの一本杉』『王将』『みだれ髪』『矢切の渡し』など。かねて「山の日がなぜないのだろう」と思っていたという。

尾上会長が冒頭の挨拶で披露した話だが、日本山岳会の「山の日」制定運動について聞きたいといわれた。会って運動の趣旨を説明したところ「全面的に協力する」とのこと。「会員になってください」と要請したところ、その場で快諾いただいたという。

船村会員は「栃木の生まれです。海がない。若いころは海に憧れたが、生まれたところが恋しくなった。芳醇な海、豊かな山、そして里があって、それらでもって日本が栄えてきた。山の日ができるよう、なんとかやりたい」と挨拶、大きな拍手を誘った。

恒例の鏡開きは、皇太子さま、尾上会長のほか日下田新名誉会員、秩父宮賞を受賞した山森会員、新永年会員を代表して平林克敏会員、そして谷垣禎一会員の6人で行なった。お酒は故今西壽雄元会長の夫人（芳子会員）から寄贈のあった「四海王」。いつもながら、感謝したい。

小倉董子会員の音頭で乾杯した。出席した女性のなかで最も会員番号が若い。会食が始まった。メニューには、山の味覚・香り、春への思い――などと、シェフからのメッセージが添えてあった。「四海王」に加え、古谷学而・山梨支部長差し入れの「ハラモワイン」もテーブルを飾った。

会食をはさんで、全国30支部の会員の紹介があった。支部活性化が叫ばれ、それぞれに動きが活発だ。今年は、東京多摩、埼玉が新たに設立された。参加者は紹介されるたびに立ち上がりハンカチを振った。恒例のイベントだ。

■海外登山報告会

晩餐会に先立ち、午後2時30分から海外登山報告会があった。いずれも日本山岳会海外登山基金の助成金を得て実施された登山隊だ。

●青山学院大学アウトライアー登山隊（報告・土田紘介登攀隊長）

ネパール東部のカンチェンジュンガ山域にあるアウトライアー東峰（7035メートル）の南西壁登攀・初登頂を目指した。「青学大隊と

しては、36年ぶりのヒマラヤ登山だった。比較的入山者が少ない地域をねらった」と土田登攀隊長は話した。隊員6人。9月10日、カトマンズ発。29日BC入り。10月11日、頂上を目指したが、支持力のない垂直に近い雪壁に危険を感じ、6700㍍で断念した。

●同志社大学西北ネパール登山隊（報告・小林博史隊長）

西ネパールの国境沿いの未踏峰チャンラ峰（6563㍍）を南西面から登頂することを目指した。「他大学山岳部に声をかけたが、同志社だけの4人となってしまった」と小林隊長は、ちょっと残念そう。ただ、「ノウハウを蓄積できた」と満足げでもあった。

8月16日、カトマンズを出発しバスで西へ移動。天気はほとんど雨、たまに晴れ。いくつもの峠を越え、チベットの国境へ、1日5～10㌔の道のりだった。9月6日、BC設営、荷揚げを繰り返し27日、C2からアタック開始。なだらかな尾根を登り正午前、全員が快晴の頂上に立った。

●マウント・ローガン南東壁登攀（報告・横山勝丘氏）

挑戦したローガン（5959㍍）はカナダ・ユーコン準州に位置し、アラスカ・マッキンリーに次いで北米大陸2番目の高峰。山麓は広大な氷河に覆われている。「とにかく天気が悪い。毎日雪が降る。壁はほとんど見えない。周囲に誰もいない」と横山氏。3人でパーティを組んだ。壁の高さは約3000㍍。標高2600㍍からクライミングを始めた。ロープを編んでハンモックをつくって睡眠を取った。5月7日、3日目の朝、壁を抜けた。初登となった。

展示会場の皇太子さまの写真の前で

■秩父宮記念山岳賞講演

秩父宮記念山岳賞を受賞された山森欣一会員の記念講演があった。「人間に焦点を合わせた、ヒマラヤ登山の実態把握と遭難状況の調査研究」という長い表題が示すように、山森会員は日本人のヒマラヤ登山と死亡事故について記録をまとめた。05年『神々の座　8000m峰挑戦の記録』を出版し、09年に7000㍍峰、さらに10年に6000㍍峰について出版した。記録によると、04年までの53年間にヒマラヤの6000㍍以上の峰に2096隊・1万3585人が入山し265人が死亡した。死亡率は2・0㌫である。死亡率は大きな反響を呼び研修を受ける姿勢が変わった。国内では40年代以降、6272人が登山で亡くなったという。

■展示会　スキークラブ、スケッチクラブが20周年企画展

展示会には、アルパインスキークラブとアルパインスケッチクラブがそれぞれ創立20周年を迎えたのを機に、記念の企画展を開いた。

スキークラブは会員108人。春と秋に全国集会を開くほか随時スキーツアーを実施している。それらの活動を記録したパネル、年報などを展示した。

スケッチクラブは会員60人。20周年を機に会員以外からも出展を求め、計61点の作品を展示した。油彩、水彩、パステル画、版画などと多様である。春と秋に全国集会を開くほか、年7～8回はスケッチ旅行を楽しんでいる。

展示会入口に皇太子さまが出展された写真が飾られた。「雪煙をあげる富士　河口湖付近」、「御来光」、「初夏の富士　機窓から」の3点。雪煙が白く輝いている。全倍という大きなサイズとあって、迫力をもって迫ってくる。

■懇親山行は鎌倉アルプス

翌日の懇親山行は集会委員会が主催し、鎌倉アルプスで行なった。JR北鎌倉駅に集合、建長寺を通り抜けて鎌倉アルプスへ。好天に恵まれ、100人近い参加者を得た。東北や九州からも多くの会員が加わり、団体で参加した支部もあった。大平山で昼食をとり、集会委員会差し入れの豚汁を楽しんだ。晩秋の古都は、カエデやイチョウなどに彩られ、錦をまとったかのよう。八幡宮の大イチョウが倒れたのは残念だが、小さな枝が成長し生命力のすごさに圧倒される思いだった。**（文＝髙橋重之）**

連続講演会「語り継ぐ日本山岳会の歴史」第3回

常にチャレンジ――第十九代会長 齋藤惇生氏

羽田栄治

阿蘇の鷲ヶ峰からヒマラヤまで

11月6日、連続講演会第3回は、第十九代会長・齋藤惇生氏をお迎えした。齋藤さんは1929年、熊本生まれ。傘寿を迎えた今年の7月、ペルーアンデスのブランカ山群をトレッキングするなど、現役で登山を楽しんでいる。

まず、山との出会いについてうかがった。旧制高校時代、誘われて山岳部に入部し、阿蘇の鷲ヶ峰での岩登りを楽しんだ。山好きの兄の影響もあったそうで、とくに岩登りに魅せられた。入学した京都大学では、伝統ある山岳部に入部。名だたる先輩諸氏の活躍に感動、羨望したという。1952年、厳冬期の知床半島へ遠征。それは雪山装備の工夫から始まった遠征であった。この年、京大グループからJACに委譲されたマナスルは、今西錦司隊により偵察、11月に帰国した。

1962年、齋藤さんにとって初の海外遠征、サルトロ・カンリへ。この遠征はAACK（京都大学学士山岳会）によって計画されたものだが、登頂の壮挙を果たし、さらにヒマラヤへの意欲を掻きたてられる。次なるヒマラヤは、1973年のAACK隊のヤルン・カン遠征、齋藤さんは医師として参加する。

日中友交を育んだチョモランマ

79年は偵察隊長を務め、80年のチョモランマ日中合同登山隊では医師として参加。85年、日中合同隊ナムナニ峰では副隊長を務める。こうした登山を通して中国登山界との人脈も増し、交流も盛んになった。88年、チョモランマ日中ネ合同隊では、中国側の統括隊長として大いに手腕を振るったことは言うまでもない。

初登頂主義をモットーとしていたAACKであるが、90年のシシャパンマ・京大医学学術登山隊は、新しいパイオニアワークとして注目を集めた。齋藤さんは、同隊の副隊長を務めた。一方、登頂者は齋藤さんを含め15人。得られた医学的研究は、「第28回秩父宮記念学術賞」を受賞した。齋藤さんは、時に60歳。ヒマラヤ8000メートル峰の頂に60歳で立った最初の日本人であった。

新しいことにチャレンジ

会長在任中、いくつかの新しいことにチャレンジした。そのひとつに「秩父宮記念山岳賞」の設定がある。この賞は、優れた登山活動、山に関する人文、自然諸科学の研究成果を讃えるというもの。登山文化においての大きな功績だ。

海外遠征登山では、98年の青年部による無酸素でのカンチェンジュンガ北面からの登頂成功がある。一方では中国との交流を深めることも欠かさなかった。

「チャレンジ精神が大切」と語る齋藤元会長（左）

2004年にオープンした国際山岳博物館（ネパール国際山岳博物館）の建設資金募金も行ない、目標以上の成果をあげた。

そして、忘れ難い思い出でとして、「折れたピッケルの合体」をあげた。平成9年度の晩餐会で、槇隊のアルバータ登頂記念に残したピッケルが後に折れ50年ぶりに合体・披露された。これがきっかけとなり、カナダとの交流もさらに深まった。

未来へのメッセージ

今なお現役で登山を楽しんでいる秘訣についての問いに、「ボケ防止、脳の活性化のためには常に新しいことにチャレンジすること」と述べた。なんとも、医師らしいアドバイスだ。

初登頂がなくなった昨今、「パイオニアワークに関心を持たない人が多くなった。そうであれば山を単に登ることだけではなく、文化的行為として広い意味での登山を楽しんでもらいたい」と語る。

山とは、「自分が生きている達成感。それが思い出となって人の心を和ませてくれるもの」と、含蓄ある言葉で結ばれた。

西北東南

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

ノシャック登頂50周年記念交歓会に参加

芳賀孝郎

1960年は、ネパールヒマラヤ8000㍍峰の難攻不落のダウラギリがスイス国際隊により登頂された年である。ネパールでは登頂記念祝賀会が登頂者クルト・ディームベルガーらの参加で盛大に行なわれたと報道された。この年日本隊は、慶応のヒマール・チュリ、同志社のアピ、京大（AACK）のヒンズークシ山脈の第2の高峰ノシャック（7492㍍）に、それぞれ初登頂した年でもある。

ノシャック登頂者の酒井敏明氏と岩坪五郎氏は、当初偵察をするのが目的であった。偵察をしてBCに帰ったところ、精悍なポーランド隊に遭遇した。彼らは陸路ウクライナ・カザフスタン等を経由してやってきたのである。ポーランド隊はこの年初めてのヒマラヤ遠征隊であり、一大国家事業として乗り込んできたのであった。隊員12名、アルプス三大北壁登頂者をそろえた精鋭部隊であった。AACKは学術隊員3名、登山隊員3名の6名であった。突如偵察から登頂に切り替えた。

当初、ポーランド隊と協力して登頂することを申し出たが、高所順応にまさった日本隊が先行した。寛大なポーランド隊は、ハムやソーセージの食料提供のほか、ブタンガスや高度計も貸してくれた。6300㍍の第4キャンプからのアタックで、ようやく午後6時登頂に成功した。帰路、クレバスのなかでビバークしての帰還であった。ポーランド隊は10日後に登頂した。

今回、「桜の花の咲く国の登山隊よりショパンの国の登山隊へ、ノシャック登頂50周年記念の交歓会をしましょう」と提案した。私はそのイベントに参加して、ポーランド隊との50年ぶりの再会と初登頂の喜びを共有してきた。

ポーランド隊は12名のうち6名存命であるが、1名米国滞在、療養中の人もいて、参加はクリンスキーとビエルの2名であった。日本隊は3名存命し、酒井と岩坪の2名が参加した。ポーランド隊2名と、日本隊2名との劇的な50年ぶりの再会、お互い抱き合っての喜びは劇的な情景であった。

ポーランド山岳会の方々も多数出席した。そのなかには有名な1976年ポーランドK2隊の隊長ヤヌシュ・クルチャブ氏がいた。同行した贄田氏は、1976年学習院スキャンカンリ隊登攀隊長で、K2のBCで彼と顔を合わせていた。この再会も偶然であった。彼の著書『ポーランド人のヒマラヤ・偉大なる登山』（ポーランド語）をいただいた。

その本は編集者よりの紹介に続き、目次は次の通りである（DVD添付）。

1・ヒンズークシ山脈登山への道、2・1976年K2への新ルートへの挑戦、3・1977年ポーランド・イギリス・ジョイント・ヒンズークシ登山隊、4・1978年チャンガバン登山、5・1980年ダウラギリ東壁登攀、6・1980年エベレスト南壁登攀、7・1981年アンナプルナ新ルート登攀、8・1982年ポーランド・メキシコ・ジョイントK2登山隊、9・1982年マカルー西壁登攀、10・1983年ガッシャーブルムⅠ・Ⅱ峰への新ルート登山、11・1985年ガッシャーブルムⅣ峰正面壁登攀、12・1986年K2南壁登攀、13・1986年マジックラインからのK2、14・1988年トランゴタワー東壁登攀、15・1990年ダウラギリ東壁単独登攀、16・次なる登山は?、17・この本の使用言葉の説明。

この本はまさしく社会主義国家ポーランドヒマラヤ登山30年間の歴史であると思う。目次から推測するとポーランドのヒマラヤ登山は、上記の通り登攀記録はより困難な新しいルートを求めての挑戦であり、不屈な精神を持つポーランド魂が現われている。

ご存知のようにポーランドは強国ロシアとドイツに挟まれた国

であり、悲劇的な歴史を繰り返して今日に至っている。私はポーランドがどのような国民性であるか興味を持っていた。寛容な精神を持ち、外国人に親切に対応してくれた。特に日本人に対して尊敬の念を持っていることを知った。

この度のノシャック登頂記念交歓会に加えて、ポーランド山岳会では11月に中村保氏を招待しているとのこと。日本とポーランド山岳会の方々との交流は今後より一層深まることであろう。今回の旅では、ショパンの音楽も聴き思い出多いものであった。

（註）ポーランド語の目次のみ解釈は、北大情報科学研究所助教授ジェプカ氏（ポーランド人）とその友人によるものである。

富士山登頂1000回を達成した實川欣伸会員

長田義則

登山行動中に「幻覚をみる」、「突然息苦しくなって動けなくなる」と話すのは、實川欣伸会員（67歳）の富士登山での体験談だ。

彼の実践する登山の特異な方法は、自らに課したハードな登山で、わが身を実験台にした、まさに荒行登山のようだ。

彼は、登山多忙のなか、支部の集まりにも気さくに交わり、彼と豪快に酒を飲む山男は周りにも多い。しかし、山登りの発想や行為においては、ずば抜けたアスリートである。

かつて村井米子名誉会員（1901～86年）が、「登りだしたら登りばかり、下りだしたら下りばかり」と、膝の疲れを嘆きもした富士山だが、實川会員には1日2登頂の基本がある。

08年、4月～11月の8カ月間に、なんと登頂数248回を数え、88日間の連続登頂と75日間の連続2登頂には息を飲まずにいられない。その年の2登頂は通算109日となる。

888回目の富士山頂、県知事と出会いの握手

彼の変則登山はこれに終わらない。一筆登山という、御殿場口↓頂上↓須走口↓頂上↓吉田口↓頂上（剣ヶ峰）↓富士宮口↓頂上↓御殿場口の起点へと、継続した登山を30時間52分で達成している。そして、「富士宮口からの8連続登頂は54時間56分」と、事もなげに話す。富士宮口からならノンストップの2時間30分で登りきる。

實川会員の一連の富士登山は、こうした不眠不休を強いるため、疲労が極限に達し、冒頭の身体変調を経験することになる。その体験談は、一般には知覚することのできない特異なものがある。

そして10月9日、富士市の田子浦港の0メートルから山頂まで50キロといわれる村山古道を大雨・洪水の荒天をついて不眠不休で歩き始め、21時間後の10日午後4時ごろ、笑顔で1000回目の登頂を達成した。山頂で大貫金吾元会員（80歳・527登）や、有元会員（60歳・353登・300名山完登）ら、豪の山仲間たちから祝福を受けた。

あたかも「わが裏山の富士山に登る」ような、實川会員の体験話は瞠目に値する。

写真は、2010年8月8日8時、山頂でのもの。「ふじのくに」づくりに取り組んでいた静岡県知事の川勝平太（62歳・元JAC会員）氏が、生まれて初めて富士山に登頂した喜びと、實川会員がこの日にごろ合わせの888回目の登頂が成された時のものだ。偶然、県知事と出会って記念写真となった。この写真から62日後、實川会員は1000回登頂を達成した。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

集会委員会

アメリカン・ロッキー4000㍍峰4座登頂の旅

9月1日～10日、「アメリカン・ロッキー　4000㍍峰登頂ツアー」に参加した。アメリカ、コロラド州は年間に300日は晴天日だという風土。それにたがわず毎日が青空に恵まれ、降られたのは最終日の移動のバスの中でのほんの2時間ほど。全日晴天の太陽の下、心ゆくまでロッキー山脈の山登りやトレッキングに興じることのできた大満足の旅であった。

成田空港に参集したのは北海道や山形県からの仲間を含めて21名。飛行機の遅れで乗り継ぎに手間どり、ロッキー山脈の麓の町デンバーに再集合できたのは夜の9時過ぎ。宿泊地のコロラド・スプリングスの町に着いたのは深夜のことであった。

翌日からはコロラド・ロッキーの大自然に浸る行脚が始まった。まずは町の上に高々と赤茶けたツンドラの山肌を見せてそびえる4000㍍峰のパイクスピークへの登山だ。登山と言ってもここは歯車を使った鉄道に乗っての楽々登頂。しかし、さすが4000㍍を越す高峰、頂上は寒風吹き、果てしなく壮大な眺めが得られた。そして次の町に移動するバスの車窓からの風景が、これまた格別に美しく、湖、森、山岳の織りなす景観に飽きることがなかった。

ガニソン国立公園のブラックキャニオンには度肝を抜かれた。500㍍を越える落差の大絶壁の峡谷。日本では絶対にお目にかかれない大自然の造形だ。5日目はいよいよ本命のエルバート山登山だ。暗い早朝からライトをつけて登り始め、標高差1400㍍を越える登高で尾根に出ると強風の洗礼を受けた。全員登頂はならなかったが大半の仲間が頂に立ち、ロッキーの登山の真髄を味わった。

続いて登ったグレイズピークとトレイズピークはガレ場の登りが続く山だったが、こちらは風もなく誠に恵まれた登山日和、ロッキー山脈を十分味わい尽くした感じであった。

連日晴天に恵まれたアメリカン・ロッキーの旅

コロラド州には1万4000フィート（約4267㍍）を超える山が54座もあり、日本の百名山のように、〝14ners〟と呼び、これを全部踏破しようとする登山者も結構いるようだ。コロラド州に高峰がそんなにたくさんあるということに驚き、今後の課題にもなるだろう。

その後、北米最高所にあるトレイルリッジロードの景勝に堪能しながらデンバーに戻り、楽しく多彩な10日間の旅を締めくくった。

（藤宗正彦）

図書委員会

メスナー兄弟のナンガ・パルバート横断をめぐって

この秋に山と溪谷社からラインホルト・メスナーの『裸の山　ナンガ・パルバート』が上梓されたのを機に、図書委員会では10月22日に第20回「山を語る」を開催し、訳者の平井吉夫氏に「メスナー兄弟のナンガ・パルバート横断をめぐって」をテーマに語ってもらった。

ナンガ・パルバート、この山にまつわる探検家や登山家の名前をあげていくと、関わったすべての人物にとって、この山が「運命の山」であることに驚かされる。1856年にシュラーギントワイトが望見し、麓の住民に山の名前を尋ねて、ウルドー語が意味する「裸の山」であることを知る。そして1895年には初めて、イギ

リスの登山家ママリーが登頂を試みる。シュラーギントワイトはカシュガルで斬首され、そしてママリーは約6000メートルに達した後に、2人のポーターとともに消息を絶った。山の時代のパイオニアともいえるこの2人の死から、この山の物語は幕を開けるのだ。

メスナーの本にはふれられてはいないが、『ヒマラヤの旅』の長谷川伝次郎も1928年に訪れている。また1939年のドイツの偵察隊は帰国直前に英独が開戦して、隊員はインドの収容所に送られる。脱走してチベットへ逃れたのがハインリッヒ・ハラーで、彼は『チベットの七年』を著わした。

そして初登頂は1953年、あのヘルマン・ブールだ。隊長のヘルリヒコッファーの撤退指示に反して単独で登頂。著書の『八千メートルの上と下』が苦闘を語る。

メスナー兄弟の横断の謎を語る平井さん

このナンガ・パルバートが、メスナーにとっても「運命の山」となるのは1970年。メスナーと弟のギュンターが登山隊に参加。兄弟で登頂の後、反対のディアミール側へ下山中に弟のギュンターが雪崩で消息を絶つ悲劇に見舞われる。ところがメスナーが名誉欲で独断専行し弟を犠牲にしたと、隊長のヘルリヒコッファーに非難されるのだ。平井氏の口から語られる、その後30年にわたるヘルリヒコッファーとメスナーの確執は想像を絶する激しさだ。抗争は「非難」「反論」「訴訟」を繰り返す。

さて、なぜ今になっての出版か。平井氏によると隊長にしか発表する権利がないという当時の「さるぐつわ契約」のせいだという。その呪縛がやっと解けての本の出版となった。ちなみにヘルマン・ブールも同じくヘルリヒコッファーとの「さるぐつわ契約」に苦しめられている。この契約が当時はどこの隊（例えばアンナプルナ登頂）でもあったとの興味深い指摘が、会場の参加者からあったことも付け加えておこう。

『裸の山』は映画化され、来年、日本で公開予定だという。「運命の山」ナンガ・パルバートがどう描かれているのか興味深いところだ。

（三好まき子）

三水会

三水会創立35周年を迎える

三水会は「旧東京支部」の行事を引き継いで以来、今年で創立35周年を迎えました。

去る10月20日、五反田の「ゆうぽうと」で記念祝賀会を実施し、尾上会長、宮下元会長も出席され70名の参列のもと、和やかな宴が持たれました。勝田実行委員長の開会の辞、塩澤代表のあいさつに続き、尾上会長、宮下前会長のごあいさつと乾杯の音頭と続きました。

次に、この5年間の会の活動を示す映像が上映され、続いて会歴の長い会員の方々のごあいさつなどがあり、和やかで楽しい宴が時間いっぱいまで続きました。

現在、三水会は会員150名、JAC本体と同様に高齢化が進んでいます。この5年間に4名の名誉会員を含む16名の方が鬼籍に入られました。また、創立以来の古い会員の方で高齢または病気のため参列されない方もおられ、寂しいことであります。しかし、古い会員の方でお元気な姿を見せていただいた方もいらっしゃり、雰囲気を盛り上げていただいたことは誠に嬉しいことであり感謝に絶えません。

三水会創立35周年記念祝賀会に参加の皆さん

11月23日には、「記念山行」を富士急沿線「九鬼山」で実施しました。前後を雨に挟まれたたった1日の晴天に恵まれ、和気藹々楽しい山行でした。

三水会もこれで新しい時代に入ります。会員のニーズに応えて次なる5年間を中興の期とすべく、全員で努力していきたいと思っております。

（川俣俊一）

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

静岡支部
創立60周年記念行事

静岡支部は古い方から7番目の支部として1950年2月26日に創立され、今年2月で満60年を迎え、いくつかの記念行事を9月に行なった。

第一弾は、静岡市民ギャラリー(旧静岡市庁舎)を会場に記念展示会を9月13日～20日まで行なった。支部の沿革、静岡の三角点網、会員の写真、会員手作りのミニチュア登山用具、実際の登山用具等200点余りを展示した。また、日本人エベレスト初登頂の松浦輝夫氏が山頂から持ち帰ったエベレストの石も展示され、来場者が見入ったりさわったりしていた。

展示会の入場者は8日間で763名と盛況の部類に入るであろう。最終日のアンケートでは、本物の登山用具を見ることが出来てよかった、富士山やマッターホルンの写真が見られてよかった、エベレストの石にふれてよかった、次回を期待する、などの声が寄せられた。

第二弾は9月25日、静岡市の「あざれあ」(NPO法人静岡県男女共同参画センター交流会議)6F大ホールにて、記念イベントを午後1時半から5時過ぎまで行なった。第一部は「静岡県の山のシンポジウム」、第二部は「講演会アフリカの山とゴリラの魅力」である。

第一部のシンポジウムでは(1)「富士山の雪崩」について、安間荘元静岡支部長と八木功会員がパネラーとして登場し、1972年3月の大量遭難を取りあげ、新雪表層雪崩でもなく春先の全層雪崩でもない緩傾斜で起こるスラッシュ雪崩について提起した。(2)「南アルプスと深南部の自然保護」について、塩沢寿雄県岳連副会長と加藤正俊県岳連理事がパネラーとして登場し、深南部の保護と一方で起きる遭難を防ぐための登山路の整備が必要かと悩ましいテーマを訴えた。(3)「南アルプスにおけるシカの食害」について、シカの食害防止に取り組む鵜飼一博会員と原田勉市岳連事務局が、シカの食害で高山植物がなくなっていった実態と、防シカネットによって高山植物が一定程度回復してきていることがプロジェクターの映像によってわかりやすく説明された。入場者アンケートの集計では、南アのシカの食害についての感想が際だって多く、次いで富士山のスラッシュ雪崩についてであった。

第二部の講演会「アフリカの山とゴリラの魅力」については、京都大学大学院　山極寿一教授のゴリラと暮らしてのゴリラの表情、ドラミングの役割、ゴリラとの出合い、再会など映像を通して分かりやすく話され、大変好評であった。

多くの方がアンケートに感想を寄せてくれた。さまざまな感想があったが、「以前より興味のあった山極先生を静岡に連れてこれる日本山岳会って凄い」という感想もあった。シンポジウムと講演会には定員250名ほどの会場に、185名が駆けつけ、熱心に聞き入り、参加してくれた。

第三弾は、会場を静岡駅前の「ホテル・アソシア静岡」に移し、記念式典と祝賀会を49名の参加で行なった。式典では、久保田支部長のあいさつ、尾上昇会長よりあいさつとJACの課題、支部60周年のお祝いの言葉をいただいた。続いて、滝田博之県岳連会長のあいさつをいただいた後、式典を終了して参加者の記念写真の撮影を行なった。

祝賀会では、小川務東海支部長、早田道治岐阜支部長、松永義夫市岳連会長のあいさつと続き、岐阜支部高木碕男名誉会員の音頭で乾杯を行ない歓談となった。歓談の始めに、支部長夫人の久保田湖水さんによる「大江山」の薩摩琵琶による見事な弾き語りの披露があった。その後、和やかな歓談が続き、一次会は9時に終了した。続いて尾上会長、山極教授を含めて二次会へ移動して宴は続いた。

記念行事の第四弾は、記念山行であった。26日、静岡空港に向か

われる山極先生を静岡駅前で見送った後、「静岡」の地名のいわれになった「賤機山（しずはた）」に駅前から歩いて静岡・浅間神社経由で向かった。19名が参加して、ややまだ暑い200㍍前後の賤機山の丘陵を3つの三角点と賤機城址を確認し、富士山や箱根の山、愛鷹連峰、伊豆半島、駿河湾に竜爪山、安倍奥の山、安倍川、国一バイパス、第二東名等を眺めながら歩いた。最後に222㍍の福成神社で集合写真を撮り、右の麻機に下る者と鯨ヶ池、賤機に下る者とに分かれた。鯨ヶ池に下った者のうち半数は新静岡に向かうバスを途中下車して浅間神社のすぐ北にある天然温泉・静岡温泉「美肌湯（びじん）」に浸かり、汗を流してから解散した。

（有元利通）

東九州支部

50周年記念の祝賀会

東九州支部は今年、創立50周年を迎え、11月6日に記念式典と講演会、7日に記念山行、さらに3日間にわたって展示会を開いた。

式典には神崎副会長ほか、九州はじめ全国から10支部の出席を得て、会員・会友合わせて約100人が参加、続く講演会には一般市民も加わって150人となり、神崎副会長の「日本山岳会と私」、最高齢で七大陸最高峰に登った東海支部の石川冨康氏（愛知県山岳連盟会長）の「美しき七つの峰」の講演を聞いた。夜は80人が参加して懇親会を開いた。

記念山行は登山と観光の二班に分かれ、鶴見岳（1375㍍）に徒歩とロープウェイで登り、山頂で乾杯した。鶴見岳の神は式内社で火男火売（ひおほのめ）の男女二柱。文字通り、別府温泉の父母ともなる山である。参加者のなかには、その夜、別府や近くの由布院温泉を楽しんだ人もいた。

「美しき七つの峰」の講演をする石川冨康氏

展示会にはマスコミの事前の報道もあって、たくさんの市民が入場した。各種登山用具の変遷や絵画、書籍類、支部による海外登山の写真などを並べたが、そのテーマは「登山と文化」とした。というのは、支部は設立以来、登山は文化であるとの立場を貫いてきたからである。その場合の文化は、単に学術・芸術にとどまらず、人間の生き方そのものであると考えてきた。

大分の山に最も古く人が入ったのは縄文時代であり、その遺物・痕跡が残されている。以降、歴史時代に入ってからも、私たちの祖先は絶えず山や森に接してきた。それは動植物の採取、狩猟、あるいは軍事目的、さらには学術的調査などさまざまなものだったが、山を神仏のいますところと考えての宗教登山を経て、やがて近代登山の時代を迎えた。

その間、一貫して人々が山に対して抱いた思いは、畏敬の念とともに親しみであり、人は山・自然に包まれてきた。近代登山が始まってからも、それは変わらずに今日に至っている。

そこで支部20周年に「自然保護に関する記念アピール」を発表して以来、30周年、40周年と「文化・山に対するわれわれの在り方」を求めてきた。そして海外へと足を延ばしていく過程で、文明が異なれば自然観、ひいては登山観にも差があることを知らされた。

まさに、山登りとはそれぞれの時代の社会や自然観を反映する文化だったのだ。それを忘れずに、今後の支部の在り方、「山の日」制定を考えたいと、支部員の皆が思った次第である。

（梅木秀徳）

図書紹介

『百年前の山を旅する』

服部文祥・著

2010年10月刊
東京新聞出版局
四六版 237ページ
定価 1799円

前著に続き期待して読んだ。張り詰めた文体で書かれた前著に比べ、今回は同行者もいて、いくらかくつろいだようにみえる。本書は近代登山の誕生を身をもって体感しようと、昔の格好にこだわり、股引と脚絆にわらじという出で立ちで時を遡る、究極のプリミティブな山旅の本である。現代文明を遠ざけて山を歩くという刺激的な体験が、7章にまとめられている。「前書き」にあるように、便利と快適さのなかで思考や発想が狭くなった現代を否定し、山に入ったら人は生き物としてあるがままの山と向き合うのが登山だと、主張は明快だ。自分の力のなさをテクノロジーで解決してしまったら生きていると実感はできない。サバイバル登山をはじめてから昔の山の人たちに思いを馳せるようになり、「百年前の山を旅する」ことにしたのだという。

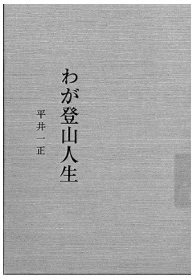
「100年前の装備で山に入る」（奥多摩笹尾根）、「日本に沢登りが生まれた日」（笛吹川東沢）、「ウエストンの初登攀をたどる」（奥穂南稜）、「鯖街道を一昼夜で駆け抜ける」と続く章では、当時のままの格好で歩くことにこだわる。「ある登攀を追いかけて」（白馬主稜）では、初代岳人編集長伊藤洋平に倣って雪の白馬を登り、上田哲農の「アルピニズムとは発狂寸前のところにその極みはあらねばならない」という主張にこだわり挑発的だ。さらに「黒部奥山廻りの失われた道」の章ではルートにこだわる。奥山廻りは登山行為ではないが、山の弱点を知り、そこをつないで山を歩く胆力を実感する。「火を持ち歩くということ」（鹿島槍北壁）の章は、登攀よりストーブという道具に、火を持ち歩くことの意味についてこだわる。著者はブラスストーブの登場は人類が厳しい自然の僻地へ侵入していく鍵とみる。ブラスストーブをめぐる思いは、プリムスを南アで拾った時に始まり、ナンセンのフラム号の北極探検にまで広がってなかなかおもしろい。

しかし、「あとがき」では、一連の登山は感慨深い登山だったが納得できるものではなかったという。著者の言う、生きていることの実感とつりあう山登りとは、実のところはなはだ危険だ。南アの沢での滑落、白馬主稜での足下からの雪崩。いずれどこかで、立ち止まるべき時がくる。著者は自らの行動を思想化できる数少ない登山家の一人だ。その思想にこだわるあまり、それに殉ずるような危険な領域に足を踏み入れていないかと危惧する。

それにしても、昔の衣装にルートに道具にこだわった本書は、明快でテンポもよく現場の緊張を伝える。時代は止まることなく移り変わる。昔を再現しながら、その時代をじかに感じとり、自然に対する誠意と敬意を私たちに伝えようとする。山登りは、昔と現代でも喜びも苦悩も含めてその本質は変わらないが、著者にとって昔の山旅は温故知新といった郷愁となっていないのがよい。著者は百年前の山を旅して、あらためて現代を問うているのだ。（絹川祥夫）

『わが登山人生』

平井一正・著



2010年10月刊
私家版
A5判 231ページ

チョゴリザ（1958年、登攀隊員として初登頂）、サルトロカンリ（1962年、登攀隊員として最終キャンプに待機、先発パーティの初登頂後、隊長命令により下山）、シェルピカンリ（1976年、隊長として初登頂に導く）、クーラカンリ（1986年、隊長として初登頂に導く）、ルオニイ（2003年、隊長として率いるも、

悪天候のため登頂ならず）。神戸大学名誉教授、システム制御情報学会名誉会員（元会長）。

登山家と学究という「二足のわらじ」をみごとに履きこなした著者の人生が、「まさに息つくひまもないと言ってよいほど、波瀾万丈であった」のは、いずれの「わらじ」もおろそかには履かぬという意地と心意気のなせるわざであった。それはもうダンディズムと評してもよいであろう。たとえば72歳で東チベットの秘峰ルオニイ登山（神戸大）隊長になったときのことを著者はこう述べる。

〈ふつう隊のお膳立てができてから老隊長が担ぎ出されるというケースが多い。それはそれなりに意味があるかもしれないが、私の場合はそういう形で担がれるということは、私の山にかける美意識から、否定的であった。今までそうであったように、あくまでも主体性をもって、山の選定から許可取得、隊の成立まで率先して行った〉

そのために必要なキャリア、ノウハウ、人脈を、著者は長年かけて培ってきた。なかでも人脈づくりは著者の得意技であり、それには著者の篤実かつ積極的な人柄が大いに与っている。本書にはヒマラヤ遠征、その前後のクライムと山歩き、人の回顧、リーダー論、研究と教育などいくつかの柱があり、いずれも興趣あふれるエッセイぞろいであるが、私は交友録にいちばん感銘を受けた。世界の名だたる登山家、若き日のザイルパートナーから、連絡将校、ポーターやトラックの運ちゃんにいたるまで、たちまち著者は交誼を結び、それを生涯の宝物にする。これが著者の人生をどんなに豊かにしていることか。

傘寿を目前にして、「私は昔から幸運の女神がついていると信じているが、人生の終盤にきて、その感を深くしている」と述べることのできる著者にとって、一大痛恨事は愛妻に先立たれたことであった。本書の掉尾を飾る亡き妻をしのぶ一章が胸を打つ。（平井吉夫）

『栃木の峠』

桑野正光・著

2010年3月刊
随想舎
A5判 215ページ
定価 1890円

本書はその題名のとおり栃木県の峠58カ所について、峠の故事来歴や峠歩きの案内を記した本である。副題に「峠でたどる暮らしと文化」とあるように、峠とそこを通った人々の暮らしや文化の変遷を地元での丹念な聞き取りに基づいて記載している。

本書の末尾の「あとがき」によれば、本書は栃木県の峠紹介の嚆矢となるものとのことで、大変意義のある本だといえる。

本書は平成19年の一年間、東京新聞栃木版に連載されたものを加筆してまとめたものであり、登山に限らず広く一般の読者を念頭において大変わかりやすく興味をそそるように書かれている。栃木県にもこんな峠があったのかということを知るとともに人口に膾炙した峠についても新たに知ることも多く、興味をもって読むことができる本である。

本書の構成は、58の峠を、日光周辺の峠、会津への峠、陸奥への峠、八溝山地の峠、塩谷の峠、芳賀の峠、県央・県西の峠、県南の峠、に分けて採り上げ、それに「はじめに」と「あとがき」を加えている。

峠の各編には、その語源、由来、歴史、変遷、人々の交流、現状、などが述べられている。歴史上の人物や事項については、ページの上に小さな解説欄があり、読者の理解を助けているほか、簡単な解説ではすまないものは一ページを使ったコラム欄を起こし説明している。

写真も豊富で、峠の雰囲気をよく伝えるとともに、今日の現状を映像で残す意図もあるように思われる。

また、各編ごとに一ページを割いて地図と「峠のみちしるべ」という現在の峠への案内が載せられている。これを読むと、昨今の自動車道路の発達で峠の歩道が荒廃したものが実に多いことを改めて認識するのである。

筆者が本書を上梓した動機は、今を措いては徒歩時代の峠の文化と歴史を伝えることができない、という切迫した危機感があったことが察せられるのである。著者は「峠は歴史の証人である」と述べ、峠の歴史を通じて栃木県という地域全体の歴史を描こうとしているようにも思えるのである。

（佐藤　勉）

会務報告

平成22年度第7回(11月度)理事会

日時　平成22年11月10日　18時35分～21時30分

場所　日本山岳会　会議室

【出席者】尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川常務理事、太田・堀井・相馬・山川・野沢・中山・永田・萩原各理事、深川・平井各監事、近藤・酒井・森各常任評議員

【委任】岡部常務理事、谷川理事

審議に先立ち尾上会長から、法人改革のタイムリミットが迫っている。皆さんの率直、活発な論議を経て意見を集約し、理事会としての合意形成をしていきたいとの挨拶があった。

審議事項および報告事項終了後、新法人移行に関し「公益法人」、「一般法人」の選択について熱の入った討議が活発に行なわれた。

【審議事項】

1・ハセツネモニュメント(石碑)設立後援名義使用願い…継続審議（神崎）

10月度理事会では継続審議扱いとなっていた。その後のほかの山岳団体の動向等を総合的に勘案して後援名義使用を認めたい。（承認）

2・秩父宮記念山岳賞（宮崎）

10月22日に秩父宮記念山岳賞審査委員会が開催され、今年度の受賞は山森欣一会員（№821 5）で、同会員の「人間に焦点を合わせた、ヒマラヤ登山の実態把握と遭難状況（ヒマラヤ＋国内）の調査研究」に対して審査委員会から推薦された。（承認）

3・商標権（ロゴマーク）の更新（宮崎）

当会の商標権（ロゴマーク）の更新時期（平成22年10月1日から10年間（平成33年3月末日まで）の登録をする。（承認）

4・「山はみんなの宝！全国大会」（藤本）

「山はみんなの宝！全国大会」（実行委員会＝前早稲田大学総長　奥島孝康、事務局長＝NPO法人山のECHO内　上幸雄）から参画願いがあった。11月30日の開催に限り参加をする。（承認）

5・植村直己エベレスト登頂映像使用許可願い（宮崎）

㈱テレビ東京から1970年日本山岳会登山隊がエベレスト登頂の映像（NHKサービスセンターに管理委嘱）使用許可願いがあった。（承認）

6・写真掲載願い（宮崎）

㈲楓工房（富山市問屋町1-1-16）から富山県教育委員会の委託で「ふるさととやまの人物ものがたり（仮称）」製作中で、宇治長次郎の写真2点について使用願いがあった。（承認）

7・『山岳』所載記事の転載許可願い（宮崎）

㈱山梨日日新聞社から『山岳』92号所収の高室陽二郎会員執筆による大沢伊三郎氏追悼文を高室陽二郎氏のエッセイ集『山と人』に転載許可願いがあった。（承認）

【報告事項】

1・新名誉会員推薦（酒井）

マナスル登頂者、日下田實会員（№4146）を評議員全員一致で推薦することを承認した。

2・森谷重二朗氏を偲ぶ会(藤本)

都岳連前会長、森谷重二朗氏を偲ぶ会が10月28日にあり出席した。

3・北九州支部10周年記念行事（会長）

10月30日に支部創設10周年記念行事が開催され出席した。

4・東九州支部50周年記念行事

（神崎）

11月6日に支部創設50周年記念式典が開催され出席した。

5・神奈川大学山岳部創部80周年記念式典（宮崎）

11月3日に創部80周年記念式典が開催され出席した（会長代理）。

6・早稲田大学山岳部創部90周年記念式典（藤本）

11月6日に創部90周年記念式典が開催され出席した（会長代理）。

7・上高地山岳研究所利用要領の改正（太田）

山岳研究所運営委員会で利用要領を10月19日に改正した。実施は12月1日以降。改正内容についてはホームページや入会案内、名簿等に掲載して徹底を図る。

8・寄付報告

①安藤治会員（No.5195　平成22年永年会員・晩餐会招待者）から、今年の年次晩餐会を欠席するとのことで金1万円の寄付があった。

②㈱尾上機械（尾上会長が代表取締役）から同社創業100周年を記念し、金100万円の寄付があった。

9・会報『山』11月号編集報告（神長）

ルーム日誌 11月

1日　総務委員会　高尾の森づくりの会　スキークラブ
2日　常務理事会　図書委員会　スケッチクラブ
4日　自然保護委員会　学生部　法人改革対応検討ＰＴ
5日　フォトビデオクラブ　スキークラブ
6日　資料映像委員会
8日　支部活性化ＰＴ　スキークラブ
9日　二火会　スケッチクラブ　スキークラブ　九五会
10日　理事会　集会委員会　山想倶楽部
11日　自然保護委員会　山岳地理クラブ　山の自然学研究会　スキークラブ
12日　会報編集委員会　スキークラブ　休山会
14日　ＪＡＣ-ＹＯＵＴＨ ＰＴ
15日　総務委員会　資料映像委員会　フォトクラブ　スキークラブ
16日　山岳研究所運営委員会　山の日制定ＰＴ　スキークラブ　00会
17日　図書委員会　集会委員会
18日　三水会　みちのり山の会　科学委員会　インターネット小委員会　法人改革対応検討ＰＴ
19日　総務委員会　スキークラブ
22日　総務委員会
24日　総務委員会　自然保護委員会　集会委員会　麗山会　つくも会
25日　ＪＡＣ-ＹＯＵＴＨ ＰＴ　法人改革対応検討ＰＴ　東京多摩支部　スキークラブ　山遊会
26日　総務委員会　資料映像委員会
29日　総務委員会　青年部
30日　総務委員会　学生部　ゆきわり会

11月来室者583名

会員異動（11月）

物故

小澤みち子（10561）10・11・22

退会

岩田傳三郎（5553）
阿部弘二（8103）千葉
堀江真理子（10050）関西
清水博一（10748）京都
齋藤　寛（13079）越後
滝沢　功（14100）

INFORMATION インフォメーション

◆スキー懇親会

集会委員会

山形蔵王で樹氷の最適時期の2月に実施します。現地集合・解散。

日程　2月20日(日)～22日(火)
宿泊　山形蔵王温泉「故郷」
費用　2万3000円（現地往復交通費は含みません）
定員　30名
申込　1月20日までに、野崎和彦
(TEL 090-8961-1866
✉nozaki_kaz@yahoo.co.jp)
＊スノーシュー・ハイク予定（ハイク費用別途徴収）地蔵岳・熊野岳の2山巡り（ロープウェイ利用）
＊申込者に詳細を送ります

◆シングーチュリ登山隊参加者募集

海外委員会

海外委員会では、来年秋、ネパールのアンナプルナ山域にあるシングーチュリ（6501㍍）を目指します。参加者自身が計画を立て実行するため、集会や高所順応訓練等の参加をしていただきます。年齢は問いませんが、北アルプスなどの冬山テント山行を現役として実践している方の参加を期待します。

シングーチュリ、6501m

期間　2011年10月中旬より約25日間
申込　2月末までに、竹花晃へ
(TEL&FAX 0476-97-0782)
✉takepokhara@gmail.com

図書受入報告（2010年11月）

著　者	書　名	ページ／サイズ	出版元	刊行年	寄贈／購入別
早川禎治	アイヌモシリの話――「アイヌモシリ紀行」その後	216p／21cm	北の野帳社	2010	著者寄贈
下田泰義（編）	登頂断念記　希望と現実の挟間で	116p／30cm	長崎県山岳連盟	2010	発行者寄贈
北大山の会（編）	北大山岳館文献目録――北大山の会第５号	63p／30cm	北大山の会	2009	発行者寄贈
太田五雄	屋久島（自然解説）――白谷雲水峡と白谷川	154p／21cm	南方新社	2010	著者寄贈
落合正治（編）	登高者の榮――神大山岳部 80 年の記録	320p／26cm	神奈川大学山岳部	2010	発行者寄贈
平井一正	わが登山人生	231p／22cm	平井一正 (私家版)	2010	著者寄贈
伊藤久次郎・関口興洋（編）	ひこさん――日本山岳会北九州支部創立 10 周年記念誌	200p／26cm	日本山岳会北九州支部	2010	発行者寄贈
根深誠	ヒマラヤのドン・キホーテ――ネパール人になった日本人・宮原巍の挑戦	309p／20cm	中央公論新社	2010	著者寄贈
石原裕一郎	首都圏 親しみの登山	199p／21cm	心交社	2010	著者寄贈
小野健	栂海新道を拓く――夢の縦走路にかけた青春	281p／18cm	山と溪谷社	2010	出版社寄贈
立山カルデラ砂防博物館（編）	立山をめぐる山岳ガイドたち	97p／30cm	立山カルデラ砂防博物館	2010	発行者寄贈
大町市立大町山岳博物館（編）	北アルプス登山史資料 1――鹿島槍ケ岳登山史	295p／30cm	大町市立大町山岳博物館	2010	発行者寄贈
大町市立大町山岳博物館（編）	アルピニズム誕生 昭和初期の鹿島槍ケ岳登山史	36p／30cm	大町市立大町山岳博物館	2009	発行者寄贈
富山県立山博物館（編）	特別企画展「登嶽同道」――竹内鳳次郎・ヒサ夫妻の山	87p／30cm	富山県立山博物館	2010	発行者寄贈
富山県立山博物館（編）	特別企画展「立山・富士山・白山 みつの山めぐり」	63p／30cm	富山県立山博物館	2010	発行者寄贈
裾野市立富士山資料館（編）	岳人 渡辺徳逸翁――富士と共に生きた人生	67p／30cm	裾野市立富士山資料館	2008	発行者寄贈
高室陽二郎	山と人	414p／20cm	山梨日日新聞社	2010	出版社寄贈
飛騨山岳会（編著）	飛騨の山――研究と案内	306p／22cm	ナカニシヤ出版	2010	出版社寄贈
小清水定男	回想の甲武信岳	53p／21cm	小清水定男 (私家版)	2010	著者寄贈
朝日新聞社（編）	ニッポン人脈記３――未知への挑戦 (朝日文庫)	288p／15cm	朝日新聞社	2006	八木原圀明氏寄贈
山田昇ヒマラヤ資料館（編）	史上最強の登山家 山田昇	12p／26cm	山田昇ヒマラヤ資料館	1994	八木原圀明氏寄贈
読売新聞社（編）	史上最強の登山家 山田昇	111p／30cm	読売新聞社	1989	八木原圀明氏寄贈
八木原圀明	氷壁に刻む――山田昇・八木原圀明 二人の登攀史	212p／20cm	上毛新聞社	1990	著者寄贈
Kapadia, Harish	The Battle of Roses――Siachen Glacier	229p／24cm	Rupa Pub. India	2010	出版社寄贈

チャレンジ　学生ネットワーク作り(4)

若い人たちへの期待と東海支部

高橋玲司

若者の山文化

今若者の間では、ちょっとした登山ブームで湧いている。アウトドアブームともいっていい。自然への回帰である。5月の室堂には多くの若いボーダーが滑りに来ていたし、夏の涸沢「カラフェス」には若い人たちが溢れるほど集う。またオートキャンプ場では、子連れの若い夫婦が目立つ。さらにファッションまで積極的に楽しむ「山ガール」などという新しい流行語までも現われている。

今や、若者もガイドを連れて山に登る時代であり、体験的なクライミングや、ガイド付きのツアー登山は人気が高い。日本山岳会に求められるのは、こういった多岐にわたって山を楽しむ若い人たちをすべて受け入れる柔軟さである。人が群れ、若い人たちが集う組織には、少なくとも未来を開く可能性を秘めていることは確かである。

多様性を受け入れる

現在、東海学連の学生のなかから、東海支部のボランティア委員会に所属した女子学生がいる。ボランティア委員会でやっている事業は、ハンディキャップを持っている人たちや幼児のための支援登山である。東海支部だからこそできる幅の広い取り組みの一環である。そのほか、東海支部には森づくりの会や高齢者のための亀の会など、尖鋭的な登山から山の文化を楽しむ同好会まで幅広い分野の活動を実施している。

学生にも、このような山に関する幅広い活動を紹介し、各種の委員会に興味を持ってもらい、支部活性化の一助となるような働きかけを行なっていきたいと考えている。登山という行為には、選択肢がたくさんあっていい。多様性はさまざまな可能性を生む。

ヒマラヤを目指す学生

東海学連から毎年、海外に登山隊を送り出すことを企画している。すべての学生が個人のレベルで楽しめるように、「トレッキングからクライミングまで」を合い言葉に、同じ目線で準備活動をやってもらうのである。現在、レベルの違う学生同志がトレッキングとヒマラヤ登山に向けて準備活動に目を輝かせて張り切っている。

来年度東海支部は、創立50周年を迎える。この記念事業で、東海学連の学生へ参加を呼び掛けヒマラヤ登山計画を練っている。複数の大学の学生が「ぜひ高度な山に挑戦したい」と、休学を覚悟して参加を申し出ているのである。

日本山岳会が進むべき道

まず明確にすべきなのは日本山岳会の今後の目指す方向ではないであろうか。多様な取り組みや組織の変革を求めるのか、それとも現在までの安定路線を追従するのか。このままでは実質的には規模が縮小し、かろうじて存続することだけに留まるのは明らかだといえよう。しかし私たち、東海支部は、たとえ日本山岳会が後者を選んだとしても、独自の取り組みで時代に相応した、生々しい山岳会でありたいと考えている。どんな組織や企業でも、時代の変革についていけない組織は滅びる。これからの私たちの取り組みをじっくり見守っていただきたいと思う。

（東海支部青年部委員長）

❖編集後記❖

●今月の理事会も「公益法人」か「一般法人」かの選択をめぐって活発な議論がありました。その内容をはじめ、今後の検討課題、そして会員からの意見などで特集を組みました。どこまで会員のみなさんに理解していただけたかちょっと不安ですが、いかがでしょうか。

●年次晩餐会が12月4日に開催されました。私は久しぶりの参加でしたが、和気藹々、とても楽しいひとときでした。例によって高橋さんに報告してもらいました。

●以上のような報告をなるべく直近の号に載せようと、ページも増やし、まさに「師走」の慌しさでした。やっと編集後記を書いて、2010年も終わりです。今年も大変お世話になりました。どうぞよい年をお迎えください。**（神長幹雄）**

日本山岳会会報　山　787号

2010年（平成22年）12月20日発行
発行所　社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5－4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261－4433
FAX　東京(03)3261－4441
発行者　日本山岳会会長　尾上昇
編集人　神長幹雄
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社